日本医史学雑誌　第54巻第3号（2008）　249–258

中世の医学者アルナウ・ダ・ビラノバ

泉　彪之助

介護老人保健施設　陽翠の里

受付：平成19年11月7日／受理：平成20年6月22日

要旨：アルナウ・ダ・ビラノバの生涯と医学的著作を概観した．アルナウは，モンペリエの医学校で学び，また教鞭を取ったが，その経歴はいく分はカタルーニャ人としてのアルナウに関連しているように思われる．
アルナウは，医学，神学，スコラ哲学，信仰に多くの著作を残した．また侍医としてアラゴン・カタルーニャ王室とローマ教皇に仕えた．彼の医学的著作といわれたあるものは，最近の研究で偽作と判定された．

キーワード：アルナウ・ダ・ビラノバ，モンペリエ医学校，中世医学

一般にArnaldus VilanovaあるいはArnald or Arnold of Vilanovaなどとして知られるアルナウ・ダ・ビラノバ（Arnau de Vilanova）（以下アルナウ）は，モンペリエの医学校で教鞭を取った中世の医学者である[1]．一方，カタルーニャはスペインのバルセロナを中心とした地方で，独特の歴史と文化を持ち，言語も，カスティリア語すなわちいわゆるスペイン語とは異なったカタルーニャ語を用いている．

著者は，今でもカタルーニャでアルナウの研究と出版が活発に行われていることを知った．カタルーニャではアルナウが郷土の偉人として尊敬されており，たとえばリェイダ大学医学部付属病院はアルナウ・ダ・ビラノバ病院と名づけられている[2]．上記の氏名もカタルーニャ語表記であり，カタルーニャ語，スペイン語文献にはアルナウのことが詳しく書かれている．著者は，アルナウについて，東京のイタリア書房の好意で，これらの言語による6編の文献[2–7]を入手した．著者はこれらの文献を完全には理解できないが，可能な範囲でアルナウのことを検討した．以下，それについて報告する．文中，カタルーニャ人の人名は，田澤耕の記載によった[1,8–10]．

なお研究の後期に，バルセロナ大学が刊行している*Arnaldi de Villlanova Opera Medica Omnia, X.1. Regimen Sanitatis ad Regem Aragonum*を入手した．これはアルナウの『アラゴン王のための養生訓』の解説・翻訳と原文を記載した大部の著述で，大部分を占める解説および翻訳はカタルーニャ語で書かれ，ごく一部（全933頁中48頁）にラテン語原文が書かれている．今，この全文を検討する力が著者（泉）にないので，この詳しい内容は別の機会に報告するとし，この書から得た知識をできるだけこの論文に反映させることとした．

1．アルナウの研究史

アルナウの医学的業績について，ディープゲン（Diepgen, P.）とその師フィンケ（Finke, H.）の研究が有名である．多くの概説が，それらの研究に基づいて書かれた[12–15]．しかしこれらの研究はいずれも百年ほど前のものであり，その後，研究が発展し，新しい知見が生まれた．特に前記のようにカタルーニャを中心として研究が発表されている．Mensaは，アルナウの全医学的著作（*Arnaldi de Vilanova Opera Medica Omnia*）の最近の批判的編集にあたったものとしてBallester, L. G., Paniagua, J. A., McVaugh, M.の名前を挙げ[4]，BatlloriはVerrier,

R. の研究をしばしば引用し[3]，またPaniaguaの業績はいろいろな文献に引用されている．アルナウについての国際シンポジウムが，1994年，2004年にバルセロナで行われた[6,7]．

2. アルナウの経歴

他の中世医学者と同じく，アルナウの経歴や医学的業績には不明な点が多い．なかでも社会人となるまでの経歴は記載がなく，確実なものがない．ここでは，諸種の文献に従いアルナウの経歴の概要を示す．

アルナウの国籍には，カタルーニャ人説，フランス人説，イタリア人説などの諸説があるが，今日ではバレンシア出生のカタルーニャ人説がほぼ定説となっている[2,3]．

アルナウの出生年は，1235年[2]，1240年[5]の二説がある．出生地も，正確には不明である．出身地を意味する付加名Vilanovaをプロヴァンス地方のVille Neuve，その他の土地に比定しようとするものがあるが[16]，一般にはバレンシア地方の固有地名としてのVilanovaと理解されるようになった[2]．バレンシアは狭義のカタルーニャとは異なるが，カタルーニャ言語圏に属する[1,17]．

バレンシアはイスラム教徒に支配されていたが，1238年にカタルーニャ領主ジャウマ一世（Jaume I）によって奪還された[8]．アルナウは，このバレンシア地方のユダヤ人の家庭に育ったとするものがあるが[1,3,4]，詳細は不明である．

アルナウは，1260年ごろモンペリエに行き，モンペリエの医学校で医学教育を受けた[2]．その間，一学期間は神学部でも聴講した[3–5]．

アルナウは，モンペリエの医学校を卒業後，1270年ごろまでモンペリエにとどまった[2,5]．その間にモンペリエ出身の女性Agnes Blasiと結婚し，二人の間には娘マリアが生まれた[2–4]．アルナウはBlasi家と特別な関係にあったようで，アルナウには兄弟，姉妹が一人ずついるが，姉妹はBlasi家に嫁いでいる．モンペリエの高名な医師兄弟，Elmengol BlasiおよびJoan Blasiは，アルナウの姉妹の子である[3]．

アルナウは，モンペリエを離れた後，ナポリで医師としての研修を受けた[2]．その後，1276年から1281年までと1286年から1291年まで，家族と共にバレンシアに住んだ[4,5]．

1281年，アルナウはカタルーニャの領主ペラ二世（大王）（Pere II）の侍医となった[4,5]．1285年にペラ大王が死去し，その後，息子たち，カタルーニャ・アラゴン王アルフォンス二世（Alfons II），シチリア王ジャウマ二世（Jaume II），フラダリック二世（Frederic II）の侍医となった．

アルナウは1290年ごろから1300年ごろまで，母校モンペリエで教鞭を取った．この間にジャウマ二世とその家族の侍医も務めた[4]．モンペリエ医学校の学長にも選ばれている．1309年，ローマ教皇クレメンス五世は，モンペリエ医学校の改革に対してアルナウに意見を求めた[4]．

1299年あるいは1300年，モンペリエの医学校を退職した後，アルナウは，ジャウマ二世のフランス王フィリップ美麗公への外交使節としてパリへ出張したが，そこで異端を疑われて投獄され，有力な友人の介入と，パリ司教およびソルボンヌの神学者たちに対して公的に見解撤回に同意したことによってようやく解放された[2,4]．その後ローマへ行き，教皇ボニファティウス八世（教皇在位1294–1303）の侍医となった．ボニファティウス八世は腎臓結石を病み，その治療のためにアルナウを侍医としたという．ボニファティウス八世の死後は，教皇ベネディクトゥス十一世（在位1303–1304），クレメンス五世（在位1305–1314，教皇庁をフランスのアヴィニヨンに移した）にも侍医として仕えた[2,18]．これらの教皇は，アルナウを異端とすることから庇護した．ボニファティウス八世は，アルナウに「神学を忘れて，医学に専念せよ」と命じたという．

アルナウは故郷バレンシアで土地のドミニコ会士と再び神学上の論争に巻き込まれ，1305年，異端審問にも遭った[2,5]．

1306年以降，医学者としての活動は少なくなり，主に政治家あるいは外交官としての活動に従事した[5]．ただしこの期間に，重要な医学上の著書，たとえば*Speculum medicinae*も執筆し，また1307年にはクレメンス五世の病気を治療した[4]．

この間，いくつもの国を訪れている．

マルセイユでアルナウは，一般にRaimundus Lullusとして知られるラモン・リュイ（Ramon Llull）と親交を結んだ[2,3]．ラモン・リュイは哲学者で，ヨーロッパで始めてラテン語以外の言葉（リュイの場合はカタルーニャ語）で思想書を書き，また言語としてのカタルーニャ語を確立したとして「カタルーニャ語の父」と呼ばれた人である[8]．

1309年，フラダリック二世にシチリアへ招かれ，夢判断を行った[4,5]．1311年，教皇クレメンス五世が滞在していたアヴィニョンへ海路行く途中[12]，ジェノヴァに近い海上で死去し，ジェノヴァの墓地に葬られた．1656年にオランダ人ファン・デル・リンデンが，ここの墓地にアルナウの墓があることを確認している[2]．

アルナウは，ラテン語，ヘブライ語，アラビア語，カタルーニャ語の4言語を学んだ．ヘブライ語を教えたのは，ラモン・マルティ（Ramon Marti）であるという[2]．

3. アルナウの医学的業績

アルナウの医学的業績について，ある研究者は，翻訳，医学理論，古典的著作家への注解，薬学理論，医学箴言，養生法，実践的医学，実践的薬学，個別的著作等に分類している[4]．

アルナウが高名な医師であったところから，他の人の著作であるのにアルナウの著述とされたものが多い．ここでは，最近の文献に従って記載する．

(1) アルナウの著作目録[5]

アルナウは多作の文章家で，知られる著述は70冊以上に上る．以下，その概要リストを記載する（*は医学・薬学の著作．下線はカタルーニャ語著作）．

De improbatione maleficiorum
**Speculum medicinae*
**De intentione medicorum*
**De humido radicali*
**De considerationibus operis medicinae*
**De aphorismi de gradibus*
**De dosi tyriacalium*
**Medicationis parabolae*
**Commentum super quasdam parabolas*
**Aphorismi particulares*
**Aphorismi de memoria*
**Aphorismi extravagantes*
**Commentum super tractatum Galieni «De malitia complexionis diversae»*
**Repetitio super canone «Vita brevis»*
**Tabula super «Vita brevis»*
Introductio in Librium Ioachim de semine Scripturarum
Allocutio super significatione nominis tetragramaton
Alphabetum catholicorum sive de elementis catholicae fidei
Tractatus de prudentia catholicorum scolarium
Tractatus de tempore adventus antichristi
Tractatus de mysterio cymbalorum acclesiae
Apologia de versutiis atque perversitatibus pseudoteologorum et religiosorum
Eulogium de notitia verorum et pseudoreligiosorum
Confessio llerdensis de spurcitiis pseudoreligiosorum
Gladius iugulans thomatistas
Carpinatio poetriae theologi deviantis
**Antidotum contra venenum effusum per fratrem Martinum de Atheca, praedicatorum*
<u>*Confessió de Barcelona*（バルセロナの信仰告白）</u>
Philosophia catholica et divina
Allocutio christini de his quae conveniunt homini secundum propriam diginitatem creaturae rationalis
**De non esu carnium in Carthusia*
Dancia Jacobi II cum commento Arnaldi de Vilanova
Epistolae ad gerentes zonam pelliceam
<u>*Lliçó de Narbona*（ナルボンヌの教え）</u>
Epistola ad priorissam de caritate
De helemosina de sacrificio
Per ció che molti（注：イタリア語著作？）
Alia informatio beguinorum

De humilitate et patientia Iesu Christi

Interpretatio de visionibus in somniis dominorum Iacobi secundi regis Aragonum et Friderici tertii regis Siciliae eius fratris

**Regimen Almariae* (*De regimine castra sequentium*)

Raonament d'Avinyó（アヴィニョンの推論）

Informació spiritual（精神の知らせ）

Constitutiones Regni Trinacriae（注：Trinacriaはシチリアの別名）

**Regimen sanitatis ad* (*inclytum*) *regem Aragonum*

**Practica summaria*

**De parte operative*

**De amore heroico*

**Regimen de podagora*

**Compendium regimenti acutorum*

他

これらのうち，カタルーニャ語で書かれた4編は，いずれも宗教的な著作である．Batlloriは，アルナウがカタルーニャ語で書いたものとして，上の著作に加えて書簡2通を挙げている[3]．また，カタルーニャ語で書かれた宗教的な著作は他にもあったが，アルナウの死後に行われた異端審問の際に焼却されたという[3]．

(2) サレルノ養生訓（*Regimen sanitatis Salernitanum*）[19] との関連

アルナウをサレルノ養生訓の著者とするものもあるが[2]，最初の詳細な注釈者とするものが多い．後述のように，Paniaguaは『サレルノ養生訓』，『サレルノ養生訓注釈』がアルナウの著作であることを否定している．

(3) アラブ医学との関連，アルコールの価値

医学を含むアラブ文化がヨーロッパへ導入されたのは，スペインのカスティリア地方，シチリア，スペインのカタルーニャ地方である．

アラブ軍がイベリア半島に進攻したのは8世紀で，アラブ文化の進んだ技術の導入がこのときから始まった．いわゆる12世紀ルネサンスにおいて翻訳・導入の中心となったのがカスティリア地方で，“トレドの翻訳工場”が有名であり，クレモナのジェラルドが高名な翻訳者として挙げられているが，すでに9世紀，10世紀にカタルーニャで早くからアラブ医学が翻訳され，その中心がリポイの修道院（Santa Maria de Ripoll）であった[2]．アルナウも，「（アラブ医学に関して）行動者であるよりも受容者であった」といわれているが[20a]，アビセンナの“心臓の力について”，Albumasar（Abu-l-Salt Umayya，下記）の“単純医薬について”を翻訳している[4]．

何人かの研究者は，Albumasarは実際にはAbu-l-Salt Umayyaであるとしている[4,20]．Abu-l-Salt Umayyaは，ヴュステンフェルト[21]，ルクレール[22]いずれのアラブ医学史にも出ている名前で，1068年にスペインで生まれ，1134年に没した医学者である．ルクレールは，これとは別にAlbumasarというアラブ医学者を記載しており，885年に没した別人である[22]．アルナウが翻訳したのは，ヴュステンフェルトがAbu-l-Saltの著書の第一に挙げている*Liber medicamentum simplicium*（単純医薬の書）[21]の原本であろう．アルナウの著書名は，翻訳した書の原著者名を誤って記載したものであろうか．

ライン・エントラルゴは，ヨーロッパへのアラブ医学導入の過程として，受容の時期，同化の時期があったとしている[23]．いわゆる12世紀ルネサンスはアラブ医学が翻訳によってヨーロッパに知られた時期であり，13世紀はヨーロッパの医師たちがアラブ医学から学んだ技法，とくに蒸留法，昇華法を実際に応用し，製薬などの技術に取り入れた時期であった[24]．アルナウはぶどう酒を蒸留し，これが鎮痛や麻痺などに一定の薬効を示すとし，これをaqua ardens（燃えるような水）と呼んだ[2,24]．

(4) Paniaguaの研究[20]

Paniagua，J. A.はアルナウの医学的業績を検討し，従来アルナウの著作として定説になっているものも著作でないとした．Paniaguaが分類している，アルナウの業績とされてきた医学的論文のリ

ストを掲げる．このリストでは，著作名の綴りが他の研究者と異なるものがあるが，そのまま記載した．

I. アルナウの業績として疑いがないもの

1. *Speculum medicine*（医学の鏡）
2. *De intentione medicorum*（医師の意図について）
3. *De humido radicali*（根本的湿気について）
4. *De considerationibus operis medicine*（医術の処置の考察について）
5. *Aphorismi de gradibus*（薬の強さの度合いに関する金言）
6. *De dosi tyriacalium*（テリアカの薬量について）
7. *Medicationis parabole*（治療のことわざ）（川喜田愛郎：医療箴言[13]）
8. *Commentum super quasdam parabolas*（或ることわざの注解）
9. *Aphorismi particulares*（個別の金言）
10. *Aphorismi de memoria*（記憶に関する金言）
11. *Aphorismi extravagantes*（途方もない金言）
12. *Regimen sanitatis ad regem Aragonum*（*Regimen sanitatis ad inclytum dominum regem Aragonum*）（アラゴン王のための養生訓）
13. *Regimen Almarie*（*De regimine castra sequentium*）（アルメリアの衛生法（持続的宿営の衛生について））
14. *Practica summaria*（実践的摘要）
15. *De parte operative*（作動する部分について）
16. *De amore heroico*（英雄の色情について）
17. *Regimen de podagra*（痛風の養生法）
18. *Compendium regimenti acutorum*（急性病の養生法要約）
19. *Commentum super tractatum Galieni De malitia complexionis diverse*（ガレノスの論文“種々の体液混合の悪い状態について”への注解）
20. *Repetitio super canone Vita brevis*（“人生は短し”という金言に関する再説）
21. *Tabula super Vita brevis*（“人生は短し”に関する表）
22. *De esu carnium*（肉食について）
23. *De improbatione maleficiorum*（悪行の否認について）
24. *Translatio Albumasaris De simplicibus*（Albumasar（実際にはAbu-l-Salt Umayya，前記）“単純医薬について”の翻訳）
25. *Translatio Avicenne De viribus cordis*（アビセンナ“心臓の力について”の翻訳）
26. *Translatio Galieni De rigore et ictigatione et tremore et spasmo*（ガレノスの“硬直・動悸・震え・痙攣”の翻訳）
27. *Translatio doctorine Galieni De interioribus*（ガレノスの教え“身体内部について”の翻訳）

これらのうち，モンペリエの教職在職中に書かれた業績（la obra de Montpellier）の確実なものは，*De intentione medicorum, De humido radicali, De consideracionibus operis medicine, Aphorismi de gradibus, De dosi tyriacalium, Tabula super Vita brevis, Medicationis parabole* であるという．

II. アルナウの業績として疑いがあるもの

A. おそらくアルナウの業績であるもの

1. *Tractatus contra calculum*
2. *De tremore cordis*
3. *Regimen contra catarrhum*
4. *Regimen sive consilium quartane*
5. *Consilium sive cura febris ethice*
6. *Compilatio de conceptione*
7. *Experimenta et recepte*
8. *De simplicibus*
9. *Antidotarium*
10. *Libellus de arte cognoscendi venena*
11. *Cura epilepsie*
12. *Astrologia*
13. *Expositio super aphorismo In morbis minus*
14. *Abbreviatio libri prognosticorum*

C. 偽作の疑いがあるもの

1. *Tractatus de epilepsia*
2. *Libellus de confortatione visus*
3. *Signa leprosorum*

4. *De urinis*
5. *Tractatus de venenis*
6. *Liber de vinis*
7. *De aquis medicinalibus*
8. *De cautelis medicorum*
9. *De sigillis*
10. *Commentum super librum Galieni De morbo et accidenti*
11. *Translatio Coste ben Luce De physicis ligatures*
12. *Translatio Hippocratis De lege*

III. 確実に偽作であるもの

1. *Breviarium practice*
2. *Regule generales de febribus*
3. *Commentum super regimen sanitatis salernitanum*
4. *De conservanda inventute et retardanda senectute*
5. *Questiones super libello De malitia complexionis diverse*
6. *De bonitate memorie*
7. *De phlebotomia*
8. *De ornatu mulerum*
9. *De decoratione*
10. *De conferentibus et nocentibus*
11. *Recepta electuarii*
12. *Regimiento de sanidad*
13. *Libro de medicina llamado Macer*
14. *Liber de vita philosophorum*
15. *Le tresor de pauvres gens*
16. *De quercu*
17. *De coriandro*
18. *Remedia contra maleficia*
19. *Rosarius philosophorum*
20. *Novum lumen*
21. *Flos florum*
22. *Epistula super alchimia ad regem Neapolitanum*
23. *De lapide philosophorum*
24. *Catena aurea*
25. *Testamentum*
26. *Translatio Alkindi De graduationibus medicinarum*

IV. 真の著者が明らかなもの

1. *Regimen sanitatis* (Salernitanum) (Magninus de Mainieri)
2. *Tabule que medicum informant* (Staphanus Arlandi)
3. *De modo preparandi cibos et potus* (Petrus Musandinus)
4. *Tractatus de medicinis digestivis et evacuativis et earum dosium* (*digestive et purgantia*) (Johannes de Parma)
5. *Tractatus de steritate* (Raymundus de Moleris)
6. *Liber de coitu* (Constantinus Africanus)
7. *Expositiones visionum que fiunt in somniis* (Guillelmus de Aragonia)
8. *Translatio Avenzoaris De regimine sanitatis* (Profacius Iedaeus)

Paniagua によれば，従来アルナウの医学的業績とされたものは16世紀に編纂されたアルナウの業績集によっている．しかしこのすべてがアルナウの業績か当時から疑念があり，最近の研究によってその内容の一部が否定された．あるものは，単純な編集上の誤りであるという．

すでに述べたものを除き，アルナウの真の医学的著作とされるもののいくつかについて，簡単な内容を掲げる．

『医学の鏡（*Speculum medicinae*）』：1308年に書かれた，アルナウのもっとも重要な医学的著作のひとつ[4]．

『医師の意図について（*De intentione medicorum*）』：モンペリエの教職在職中，最初のころに書かれた著作[4]．

『根本的湿気について（*De humido radicale*）』：推論的，スコラ的な著作．医師の目的は，真理の探究でなく，病気の治療であるとしている[4]．

『医術の処置の考察について（または瀉血について）（*De considerationibus operis medicinae (sive de flebotomia)*）』：主な記載は医学的処置と治療法，とくに瀉血について[4]．

『薬の強さの度合いに関する金言（*Aphorismi de gradibus*）』：治療薬の分量と強さの度合いに関す

る考察だが，14世紀はじめに行われた論争の資料として歴史家から重視されている[4]．

『医学のことわざ（*Medicationis parabolae*）』，『或ることわざへの注解（*Commentum super quasdam parabolas*）』，『個別の金言（*Aphorismi particulares*）』：それぞれ342, 21, 211の金言が書かれている[4]．

『解毒法（*Antidotarium*）』：McVaughは，少なくともこの著作の一部はアルナウの執筆であるとしている[25]．

『肉食について（*De (non) esu carnium (in Carthusia)*）』：カルトゥージア教徒の肉食を禁じている宗教的戒律を弁護する著作で，1302年から1305年の間に，むしろ宗教面の動機から書かれたという[26]．

『アルメリアの衛生法（持続的宿営の衛生法について）（*Regimen Almarie (De regimine castra sequentium)*）』：1309年，いわゆるアルメリア戦役に従軍中にこの著書が書かれた．比較的長期間軍事行動に従事した場合の衛生法を述べている[4]．

『アラゴン王のための養生訓（*Regimen sanitatis ad (inclytum) regem Aragonum*）』：シチリア王ジャウマ二世が1305年に病気になり，その要請によってこの著書が書かれた[4]．この書は18章から成り，大気と住居，身体運動，入浴と洗髪，睡眠と身体の安静・性生活，パン・野菜・果物・肉・魚などの飲食物の規範と方法，労働と休息を交互に取ること，身体の衛生，身体への影響のための心の病気，などを扱っている[11,27]．ジャウマ二世の個人的な病気としては，最後の章で痔疾について書かれている[3,4,11]．

アルナウの医学的著作はすべてラテン語で書かれているが，この書は，アルナウの生前，王妃Blancaの希望により侍医外科医Berenguer Sarrieraによってカタルーニャ語に訳された．その後，ヘブライ語訳，イタリア語訳，スペイン語訳などが作成され，広く読まれた[3,4]．現在，カタルーニャ語訳3編，ヘブライ語訳8編が残っている[11]．

『（人間の骨の）作動する部分について（*De parte operativa*）』：感覚神経と運動神経が書かれており，麻痺の種々の側面が区別されている[2]．

(5) アルナウの著作と誤り伝えられている業績

先に述べたように，アルナウが高名な医師であったため，多くの業績がアルナウに帰せられている．その中で，Paniaguaが指摘している重要なものを記載する．

アラブ医学の翻訳：コスタ・ベン・ルカ，アルキンディ，アベンゾアールなどの著作を翻訳したとされるが誤りで，アラビア語を経過しているがヒポクラテスの*De lege*の翻訳もアルナウ訳のものではないという[20]．

『簡約医学（いわゆる*Breviarium*）（*Breviarium practice*）』：アルナウの代表作として有名な著作である．しかしこれがアルナウの著書であるのか，すでに18世紀から疑念があり，PaniaguaはVerrierによって否定されたとしている[20]．しかし現在でも，これにはいろいろな議論がある[3,4]．

『サレルノ養生訓（*Regimen sanitatis Salernitanum*）』：『サレルノ養生訓』の著者は14世紀のMagninus (Maino) de Mainieriであり，これがアルナウの著書とされたのは，アルナウの著作の『アラゴン王のための養生訓』（*Regimen sanitatis ad regem Aragonum*）のラテン名が，『サレルノ養生訓』（*Regimen sanitatis Salernitanum*）と類似しているからだけの，16世紀に行われた業績集編集上の誤りという[20]．『サレルノ養生訓注釈（*Commentum super regimen sanitatis Salernitanum*）』も，Paniaguaはアルナウの著作であることを否定している[20]．

錬金術との関係：16世紀に編纂されたアルナウの医学的業績集には，魔術や錬金術の書も含まれている[4]．アルナウの錬金術との関係について，いろいろな議論がある．Paniaguaは，アルナウには錬金術の著作4篇，小論文3篇があるとされるが，すべて偽作であるという[20]．2004年に行われた国際シンポジウムは，アルナウの錬金術との関係を中心にしているが，多くの論文がイタリア語で書かれており，詳細は不明である[7]．

4. アルナウの思想上の業績

アルナウは，医学者としてのみでなく，神学，スコラ哲学，信仰などの面で著述を残した．しかし前述のようにパリでは異端を疑われ，投獄され

た．後にバレンシアでドミニコ会士と神学上の論争を行っており，異端審問も行われた．パリで異端とされたのは，*De consummatione saeculi*[4]または『アンティクリストの到着と世界の終わり』[2]という著書で，悪魔が人間となったアンティクリストは，1345年に到着し，その少し後に世界が終わりになるだろうとの主張であった．アルナウは，教会の改革と宗教の刷新を主張したという[2]．異端審問所が常設の宗教裁判所として法的に設置されたのは15世紀だが，当時のローマ教会は俗世間的の権力を確保するのに熱心で，異端を排除して教義上の権威を確立し，それを権力支配の根拠としようとした．その典型が，13世紀はじめに南フランスのカタリ派を弾圧したアルビジョア十字軍であった．

アルナウの思想全体，とくに神学に関する研究は多数に上るが，その分析は著者の能力にあまり，また本稿の目的ではないので省略する．

5. アルナウの仕えたアラゴン・カタルーニャ連合王国の君主たち

アルナウは，アラゴン・カタルーニャ連合王国の宮廷に仕えた．現在はアラゴンもカタルーニャもスペインの一地方に過ぎないが，アラゴン・カタルーニャ連合王国は中世には地中海領域に大きな力を持つ大帝国であった．アルナウの生涯を理解する上で必要な，連合王国の君主たちについて述べる[8]．

カール大帝が800年に即位して始まったフランク王国は，バルセロナ伯領を置いて統治した．バルセロナ伯は，この歴史に従い，アラゴン・カタルーニャ連合王国の場合を除き，カタルーニャ王という称号を用いなかった．

アルナウが生まれる約百年前，1137年，カタルーニャの領主ラモン・バランゲー四世（Ramon Berrenguer IV）（在位1131–62）とアラゴン王の令嬢パルネリア（Peronella）が結婚して，カタルーニャ・アラゴン連合王国が生まれた．

アルナウが生まれたころ，ジャウマ一世（在位1213–76）は，バレンシアなどイスラム教徒に占領されていた土地を解放した．

ジャウマ一世の子が，ペラ二世（大王）（在位1276–85）とマリョルカ王ジャウマ二世（シチリア王ジャウマ二世と別人）である．マリョルカ王ジャウマ二世は，ジャウマ一世からモンペリエも相続した．

アルナウが侍医として勤務していたころ，フランスはシチリアを占領し支配していたが，占領軍の圧政にシチリアの民衆が立ち上がり，実力行使を行ってフランス軍を追放した．民衆から支援を求められたアラゴン・カタルーニャ連合王国がフランスに立ち向かい，支配を確立してアラゴン王ジャウマ二世がシチリア王となった．いわゆるシチリアの晩祷事件（1282年）である．この結果，シチリアはアラゴン・カタルーニャ連合王国の支配下に入った．

ペラ二世（大王）の死後，息子アルフォンス二世（在位1285–91）が跡を継いだが，在位短期間で死去したので，弟ジャウマ二世（在位1291–1327）がその後継者となり，前記のようにシチリア王も兼ねた．ジャウマ二世の跡は，シチリア王位を弟フラダリック二世が，カタルーニャ王位を息子アルフォンス三世が継いだ．

6. モンペリエとカタルーニャ

アルナウは，モンペリエの医学校で学び，また教鞭をとった．そのことは，アルナウがカタルーニャ人であったことと関係があるようにおもわれるので述べたい．

バルセロナ伯ラモン・バランゲー三世（Ramon Berrenguer III）（在位1097–1131）は，プロヴァンス伯ドルサと結婚し，これがカタルーニャの南仏支配の始まりであった[8a]．

モンペリエとカタルーニャは関係が深く，モンペリエはしばしばカタルーニャの支配を受けた．「1世紀半前から，モンペリエ伯はバルセロナを国の首都で商業港と考えていた．1204年にモンペリエ伯の令嬢マリアがカタルーニャ・アラゴン連合王国の王ペラ一世（ジャウマ一世の父）と結婚したとき，その関係はさらに深まった（泉訳）」[2a]．

先に述べたように，ジャウマ一世が死去したと

き，息子マリョルカ王ジャウマ二世は，父の領土であったモンペリエも相続した．ペラ一世以来，バルセロナ伯が婚姻によってモンペリエの支配権ももっていたのである．

モンペリエという都市は1000年ごろに建設され[2]，モンペリエ医学校は1100年ごろに創設されたといわれる．

モンペリエのあるラングドック地方は，ラング・ド・オック，すなわちオック語[28]が母語となっていた地域である．オック語は南仏語，プロヴァンス語とも呼ばれ[29,30]，南仏で広く用いられた．オック語は，語法的にはカタルーニャ語とも似ている．初期のカタルーニャ文学の韻文は，オック語で書かれた[1]．プロヴァンス，ラングドック，カタルーニャは，南フランスからイベリア半島北部の地中海沿岸にあり，一続きになっている．

フランスにはオイル語，オック語の2種の言語があった．北のオイル語がフランス語として用いられるようになったのは，1539年に出された，王国の裁判文書，公文書が北のフランス語（オイル語）によって書かれることを規定したヴィレール・コトレの勅令以来である[29]．アルナウがモンペリエで学び，また教鞭をとったのは13世紀で，ヴィレール・コトレの勅令のはるか昔であった．当時モンペリエがオック語を母語とする地域であったのは疑いがない．そのことは，カタルーニャ人としてのアルナウの生涯を考えるとき，ひとつの要素となるのではないか．

モンペリエの医学校の歴史を考えるとき，地域的な背景をあまりに重視するのは問題であろう．医学校で使用された言語はラテン語であったと考えられるし，教師や学生はヨーロッパ各地から集まったと思われる．しかしモンペリエのあるラングドック地方で言語的に北フランスとは異なったオック語が用いられていたこと，モンペリエを含むラングドックとカタルーニャとが地域的に密接な関係にあったことは，注目してよいだろう．

謝　辞

文献入手に協力されたイタリア書房（東京）に深謝する（本稿の要旨は，平成19年4月，第108回日本医史学会総会で発表した）．

参考文献

（(カタ)：カタルーニャ語，(ス)：スペイン語）

1）M・ジンマーマン，M=C・ジンマーマン著，田澤耕訳『カタルーニャの歴史と文化』86，白水社クセジュ文庫，2006.

2）Lobo Gil, R.: Petita historia d' Arnau de Vilanova, Editorial Mediterránia, Barcelona, 1999.（カタ）

2a）Ibid. 7.

3）Batllori i Munné, Miquel: Arnau de Vilanova i l'Arnaldism, Tres i Quatre, Valencia, 1994.（カタ）

4）Mensa i Valls, Jaume: Arnau de Vilanova, Rafael Dalmau (ed.), Barcelona, 1997.（カタ）

5）Mensa i Valls, Jaume: Arnau de Vilanova (c. 1240–1311), Ediciones del Orto, Madrid, 2000.（ス）

6）Trobada Internacional d'Estudis sobre Arnau de Vilanova, Actes de la I Trobada Internacional d'Estudis sobre Arnau de Vilanova (1994), Institut d'Estudis Catalans, II vols. 1995.

7）Trobada Internacional d'Estudis sobre Arnau de Vilanova, Actes de la II Trobada Internacional d'Estudis sobre Arnau de Vilanova (2004), Institut d'Estudis Catalans, 2005.

8）田澤耕『物語 カタルーニャの歴史』，中公新書，2000.

8a）同書40頁.

9）ロバート・ヒューズ著，田澤耕訳『バルセロナ―ある地中海都市の歴史－』，新潮社，東京，1994.

10）田澤耕『エクスプレス カタルーニャ語』，白水社，東京，2001.

11）Arnau de Vilanova: Regimen sanitatis ad regem Aragonum, Arnaldi de Vilanova Opera Medica Omnia, X.1. Publications de la Unversitat de Barcelona, 1996.（カタ，ラテン）

12）小川政修『西洋医学史』403–406，日新書院，東京，1944.

13）川喜多愛郎『近代医学の史的基盤（上）』149–150，岩波書店，東京，1977.

14）Garrison, F. H.: An Introduction to the History of Medicine, 163, W. B. Saunders, Philadelphia and London, 1929.

15）Castiglioni, A.(translated by E. B. Krumbhaar): A History of Medicine, 348–349, 2nd ed., A. A. Knopf, New York, 1958.

16）Cunha, F.: Arnaldus Villanova, Am. J. Surg. 68: 272–278, 1945.

17）アンリエット・ヴァルテール著，平野和彦訳『西欧言語の歴史』230，藤原書店，東京，2006.

18）マックスウエル・スチュアート，P. G. 著，高橋正男監修『ローマ教皇歴代誌』159–165，創元社，大阪，1999.

19）Harrington, J.: The School of Salernum (Regimen Sanitatis Salernitanum, the English version), Paul B. Hoeber, New York, 1920.
20）Paniagua, J. A.: En torno a la problemática del corpus científico arnaldino, 9–22, *in* Ref. (6) II.（ス）
20a) Ibid. 19.
21）Wüstenfeld, F.: Geschichte der arabischen Ärzte und Naturforscher, 92, Georg Olms, Hildesheim, 1963 (Göttingen, 1840).
22）Leclerc, L.: Histoire de la Médecine Arabe II, 74, 509, Burt Franklin, New York, 1970 (Paris, 1876).
23）Laín Entralgo, P.: Historia de la Medicina, 197, Ediciones Científicas y Técinicas, S.A., Barcelona, 1994.（ス）
24）McVaugh, M. R.: Chemical medicine in the medical writings of Arnau de Vilanova, 239–267, *in* Ref. (7).
25）McVaugh, M. R.: Two text, one problem; the authorship of the Antidotarium and De venenis attributed to Arnau de Vilanova, 75–94, *in* Ref. (6) II.
26）Bazeli, D. M.: De esu carnium: Arnald of Vilanova's defence of Carthusian abstinence, 227–248, *in* Ref. (6) II.
27）Artau, D. J. C.: Relaciones de Arnau de Vilanova con los reyes de la casa de Aragón, Graficas Marina, Barcelona, 1955.（ス）
28）佐野直子編『オック語分類単語集』，大学書林，東京，2007.
29）工藤進『ガスコーニュ語への旅』，大学書林，東京，1988.
30）亀井孝他編『言語学大辞典 第2巻』872，三省堂，東京，1993.

Arnald of Vilanova, a Medieval Medical Scholar

Hyonosuke IZUMI

Caring Institution for the Aged HISUI-NO-SATO

The life and medical writings of Arnald of Vilanova are reviewed. He studied and taught medicine at the Montpellier Medical School. His academic career seems to have been partially related to his being a Catalan.

He wrote much on medicine, theology, scholastic philosophy and religious faith, and as a court physician he served the Aragon-Catalonian Royalty and the Popes. Recent research has suggested the possibility that some of his medical writings were apocryphal.

Key words: Arnald of Vilanova, medical school of Montpellier, medieval medicine